

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3570400303		
法人名	社会福祉法人 山口県社会福祉事業団		
事業所名	グループホームオアシスはぎ園		
所在地	山口県萩市大井1689番地13		
自己評価作成日	平成22年8月9日	評価結果市町受理日	平成23年1月18日

事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度ホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://kaigosip.pref.yamaguchi.lg.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 やまぐち介護サービス評価調査ネットワーク		
所在地	山口県山口市吉敷下東3丁目1番1号 山口県総合保健会館内		
訪問調査日	平成22年9月8日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者の心身機能維持・向上を目的とした強歩訓練の実施や趣味活動などの個別活動支援を推進している。当法人は「その人らしさを大切に」というテーマを理念として掲げている。当グループホーム職員はその理念を集団ケアではない、個人の生活を重点に置いたユニットケアの中で実践しようと日々、奮闘している。利用者へのきめ細かな配慮をし、安心した環境で利用者のニーズに対して、より個別に生活設計が可能になるよう支援している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

毎月「利用者懇談会」を開き、一人ひとりのその時々々の意向や好み、暮らし方の希望等を聞いて職員全員で把握に努められ、一人ひとりがその人らしく暮らせるようケアに取り組んでおられます。事業所内での調理、配食サービスの利用等をうまく取り入れて、利用者個々のできることを活かしながら調理、食事、後片付けなどの一連の作業を職員と一緒にされ食事が楽しめるように工夫をしておられます。また、利用者の意向を取り入れて夜間入浴の取り組みも始められ、利用者がくつろいで入浴を楽しまれるよう工夫されています。

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 該当するものに 印	項目		取り組みの成果 該当するものに 印
57	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	64	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
58	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	65	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
59	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
60	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員は、活き活きと働けている	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
63	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人が掲げる理念は玄関および事務所に掲示している。毎月のミーティングにおいても、「その人らしさを大切に」というスローガンをどのように実践できるかを議論している。	地域とふれあい、家庭的な環境と安心した生活の下で「その人らしさを大切に」の理念を毎朝の朝礼、毎月のミーティング時に全職員が共通理解に努め、日々実践に取り組んでいる。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域ボランティア(活花、習字、銭太鼓など)の来園は最低でも月2回はある。また、隣の保育園と共催する「夏祭り」や地域の人々と一緒につくる「畑作り」、利用者と共に買う買い物等、地域住民と交流する機会を設けている。	保育園と共催の夏まつり、農協管理の畑で中学生、小学生と一緒に畑作りや収穫をしている。また、ふるさと祭りの展示即売への参加、作品の展示、ボランティアの来園や散歩時の挨拶等で地域の人たちと日常的に交流している。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	グループホームの様子を、地域交流の機会などを利用して紹介すると共に、実際に来園してもらい、利用者や相談してもらいながら、認知症について理解してもらっている。	/	/
4	(3)	評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	外部評価の目的や、その意義などは日ごろからスタッフに伝え、理解している。自己評価においては職員に配布して意見をまとめ、管理者が集約している。外部評価の結果は職員会議で検討し、運営推進会議に報告している。	ユニットリーダーが中心に意見を集約し、管理者がまとめている。外部評価結果について職員会議、運営推進会議で報告し、検討して支援に活かしている。	
5	(4)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催し、各地区民生委員、福祉員、農協婦人部員、市包括支援センター職員、家族代表、利用者、園長、管理者、職員(責任者)を構成員とし、活動報告や地域からの要望などを意見交換している。	地区民生委員(8人)、福祉員、農協婦人部員、市地域包括支援センター職員、家族代表、利用者等で2ヶ月に1回開催し、行事報告、外部評価報告、職員の異動、夏まつりの催し物等について意見交換をして、サービスの向上に活かしている。	
6	(5)	市町との連携 市町担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市包括支援センターとは、常日頃から介護保険制度について問い合わせや、待機者の状況確認などを通してグループホームの運営にまつわる様々な面で交流がある。	地域包括支援センター、介護保険課などの関係機関と常に情報交換し、相談等で協力関係を築くように取り組んでいる。	

グループホーム オアシスはぎ園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的な勉強会等を通し、認知症ケアの基本原則である「身体拘束禁止」は抵触する事例を具体的に紹介し、自己のサービスを見直す機会を設けている。	マニュアルを作成し、ミーティング時の勉強会で身体拘束をしないケアに努めると共に、言葉づかいにも気配りをしている。玄関は施錠せず、外出を察知した場合は一緒に出かけると共に、要因について話し合い、工夫に努める支援をしている。	
8		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待についての勉強会も、定例の職員会議や職場内研修を通して理解を深めるように努めている。日頃のケアの中で虐待の範疇に抵触する部分がないかどうか、自己のサービスを見直している。		
9		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人制度に代表されるような、権利擁護事業についての勉強会は十分に取組みられているとは言えない状況がある。今後は、職場内研修や外部講師の依頼も含めて、利用者の権利を守る制度や倫理観の拡充を深める取り組みをしていく予定である。		
10		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時などは管理者が身元引受人としっかり対話する時間を確保して対応している。契約書や、重要事項説明書を使用して、懇切丁寧に、わかりやすい説明方法を実践している。		
11	(7)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等からの相談、苦情の受付体制や処理手続きを定め周知するとともに、意見や要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者においては、随時、苦情を受け付ける体制はある。毎月の利用者懇談会などを通して意見の集約も実施している。また、家族の面会時などでも、気軽に要望を訴えやすい雰囲気作りをし、意見を改善に反映させている。	毎月利用者の要望を聞く「利用者懇談会」を設け、家族にはホーム便りで状況報告をし、家族会、運営推進会議、来訪時、電話等で意見、要望を聞いている。相談、苦情受付体制、処理手続きを定めて周知し、意見、要望を言える雰囲気づくりに努め、運営に反映させるようにしている。	
12	(8)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、グループホーム会議を実施する際には、自由かつ建設的な意見を求めるように努めている。多数少数にかかわらず、利用者の生活の質を高め、かつ実効性のあるものであれば、提案されたものを即、行動に反映させるよう取り組んでいる。	毎月のグループホーム会議で、職員・リーダー・管理者が「介護支援の質の向上」に向けて提案・検討し、利用者に寄り添い、その人らしさを大切に支援できるよう取り組んでいる。	

グループホーム オアシスはぎ園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	全ての職員がモチベーションを高め、自己研鑽しながら業務に取り組む姿勢を園自体が推進している。さまざまな諸条件はあるものの、質の高いケアはやりがいのある職場から生まれるとの思想の元、職場環境の整備に意欲的に取り組んでいる。		
14	(9)	職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	山口県ひとづくり財団からの研修通知などがあれば、積極的に参加させている。職員の経歴や勤続年数などからスキルアップを図ることはもちろんのこと、対費用効果的な側面からも勘案し、園にとって必要な人材作りを目指している。	職員各自に応じた段階的な内部・外部研修への参加の機会を勤務の一環として提供し、復命をして全職員が共有出来るようにしている。また、事業所独自の勉強会や日々の業務の中での体験を学びにつなげていくため、現場で共に考え、働きながらのトレーニングをしていくよう努めている。	
15		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	萩市内にあるグループホームとの交流は時々ある程度だが、互いの園で困った事例の対応策を電話で協議しあったり、相互訪問したりするといった取り組みはすでに実施している。今後は市レベルでグループホームの質を高めていけるように相互交流を図っていく必要がある。		
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
16		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人が抱えてるニーズを見つけ出し、サービスに結びつけるプロセスを管理者や計画立案責任者を中心にして関係職種が複数の目線で共に考える取り組みを実施している。		
17		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人のニーズと家族のニーズは必ずしも一致しないものだが、サービスを展開していく上では家族の協力は必須である。そのような前提のもと、定期的な家族へのヒヤリングや満足調査など機会を利用して要望や思いを聴き取るようにしている。		
18		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	居宅介護支援事業所とも連携し、入所されるまでのアプローチを円滑かつ本人ならびに家族が納得する形で支援するように努めている。特に、医療情報においては、ケアマネを通して情報収集を徹底し、入所後の健康管理が適切なものになるように努めている。		

グループホーム オアシスはぎ園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活の中で、職員と利用者がお互いに影響しあって、成長できる関係づくりをしている。		
20		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	グループホームでの生活においてどれだけ協力を上げるか、職員が共通認識の下で家族との信頼関係づくりに励んでいる。		
21	(10)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や知人との面会、あるいは本人自らの訪問など、これまでの生活環境から継続性のあるものについては、一人ひとりの状況にあわせつつ、途切れることがないように支援するようにしている。	知人、友人の面会や利用者が同敷地内のサービス、特養に知人を訪ねたり、自宅訪問、馴染みの美容院に出かけるなど、できるだけ地域との接点を持ちながらの関係継続の支援に取り組んでいる。	
22		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	プライベートな時間(空間)への配慮と、なじみの場所での活動への参加機会の提供など、メリハリの持てる生活を支援している。		
23		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院時の理由により退所になったご家族に対しても1~3ヶ月間隔でご連絡を差し上げるようにしている。これまで生活をしてきた関係性は大切にするという方針はホームにおいても重要視している部分である。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
24	(11)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	認知症の程度にもよるが、本人の暮らしぶりに関する意向調査の結果を踏まえ、ケアの支援内容に活かす取り組みをしている。	毎月1回「利用者懇談会」を開き、暮らし方の希望、意向や好みの把握に努め、一人ひとりが「その人らしく」暮らせるように検討している。	
25		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントシートを活用し、居室内の装飾や生活習慣といった所から本人らしさを残し、継続して引き出す取り組みは園が大切にしているところである。		
26		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	アセスメントは担当職員を中心にして定期的実施している。持てる力を引き出し、目標指向型の生活支援を実施できるよう、日々取り組んでいる。		

グループホーム オアシスはぎ園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27	(12)	<p>チームでつくる介護計画とモニタリング</p> <p>本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している</p>	<p>個人の考えや習慣などが反映された生活を支援していくよう、朝の引き継ぎ時や定期的な会議時などを活用し啓蒙するようにしている。</p>	<p>毎月「利用者懇談会」で聞きとった利用者の思いや家族からの意向を参考にして話し合い、介護計画を作成している。</p>	<p>・モニタリングの工夫</p>
28		<p>個別の記録と実践への反映</p> <p>日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている</p>	<p>パソコンを活用し介護計画の見直しに活かしている。</p>		
29		<p>一人ひとりを支えるための事業所の多機能化</p> <p>本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる</p>	<p>併設の特養には移動図書館の他、俳画塗り絵ボランティアに訪問等があるごとに出向いている。利用や利用者のニーズに応えられるような様々な取り組みが実践されるホームづくりを目指し努力している。</p>		
30		<p>地域資源との協働</p> <p>一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している</p>	<p>地域にある学校や農協、漁協、地区住民と一体となった園運営を推進する一環として、地域の畑で児童と一緒に芋を植えたり、地域の商店街で利用者とともに買い物をして顔なじみの関係を作るなどの取り組みを実施している。</p>		
31	(13)	<p>かかりつけ医の受診支援</p> <p>受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している</p>	<p>入居時にかかりつけ医の希望を聴いている。内科は協力医療機関がかかりつけ医となり、週2回の往診がある。眼科や歯科などの受診は家族と相談し、ご家族での対応を基本に臨機応変な対応をして適切な医療を受けられるように支援している。</p>	<p>内科については協力医療機関をかかりつけ医としており、週2回の往診がある。眼科・歯科等の受診は利用者、家族と相談し、情報提供して適切な医療が受けられるよう支援している。</p>	
32		<p>看護職との協働</p> <p>介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している</p>	<p>健康管理としてのバイタルチェックや、医師の往診時での診察補助など、日頃のケアの中で体調面における気づき事項などの報告、相談、助言するようにして利用者の健康管理に努めている。</p>		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院などの事態に対しての備えとして、市内の関係病院にある地域連携室などへ定期的に訪問するなどして連携体制の強化を図っている。		
34	(14)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人はもとより家族と協議し、積極的な医療を望む、あるいは自然の成り行きとしての最期を望むのかを確認するように体制を整えつつある。現時点での終末期への取り組みは職員間で徹底できていない。	入居時に本人、家族に重度化した場合の対応のあり方を説明している。事業所として終末期の対応についての全職員での話し合い、方針の共有の検討を始めたばかりである。	
35	(15)	事故防止の取り組みや事故発生時の備え 転倒、誤薬、行方不明等を防ぐため、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組むとともに、急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身につけている。	利用者一人ひとりのリスク面からアセスメントを実施し、想定される事故を精査した上で日々のケアに反映させている。事故やリスクを予知予見する能力を磨くための勉強会を職員会議内で開催していると共に、事故発生時の対応方法について職員間で統一認識を持つような取り組みも実施している。	ヒヤリはっと事故報告書を記録し検討して、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組んでいる。発生時対応マニュアル、夜勤時対応マニュアルを作成し、AEDを事務所内に設置している。全職員の訓練実施、救急救命法は今年度実施予定である。応急手当等の定期的な訓練は実施していない。	定期的な訓練の実施
36	(16)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	大井地区は大雨の時に浸水被害が想定される場所である。それを踏まえ、避難訓練時には避難経路の確認を重点事項とし、定期の火災訓練、通報訓練を実施して職員への周知徹底を図っている。防災協力体制として地域の住民への協力も呼びかけている。	年2回昼、夜想定避難訓練、通報訓練(夜間通報訓練)を実施している。災害マニュアルを作成し、民生委員、消防分団員に協力を呼びかけている。	
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
37	(17)	一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	園の接遇マニュアルに沿って職員のサービスマナー向上に努めている。新人職員に対しては中堅職員が指導役として付き添い、指南するなどの体制を講じている。	接遇マニュアル、排泄、入浴マニュアルを作成し、プライバシーの確保に努め、誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけをしない対応に取り組んでいる。	
38		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	月に1回の懇談会を開催し、利用者の要望を聴き取る機会を設けている。また、普段の生活支援の中で本人の隠されたニーズを掘り起こすとともに、外出や面会などの希望などを実現できるよう各事業所間で協力体制を考えている。		

グループホーム オアシスはぎ園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	特に日課というようなものは設定していない。月内での大きな行事や訪問などの日は紹介するが、基本的には利用者が自己選択や自己決定できるよう生活支援を行っている。(嗜好調査や体を大きく使う運動と、椅子に座ってできる作業との選択支援など)		
40		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	在宅生活時にお気に入りだった衣類を持参してもらったり、なじみのある格好をしてもらうことで御洒落や身だしなみとともに安心感のある生活環境支援を行っている。		
41	(18)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の調理段階で、じゃがいもの皮むきやえんどうまめの筋取り、もやし根除去など、実際の調理作業において利用者のできる部分は積極的に実施してもらっている。エプロンをつけ、台所に立ち、味付けまでも実施したいと申し出る利用者もいる。	朝食、夕食と週3回の昼食は職員と一緒に調理している。盛り付け、後片付け、茶碗洗いなど、利用者のできることを一緒にしている。利用者と職員と一緒に食事をし楽しめるように支援している。	
42		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量は入居者全員にチェックを行っているが、個々の身体状況により栄養バランスが適切かどうか、水分補給が基準値を満たしているかどうか等の点において特に重視して観察している。本人の嗜好なども勘案しながら、改善すべき項目の是正に取り組んでいる。		
43		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	身体的なレベルにもよるが、できるだけ利用者本人に口腔ケアを実施してもらっている。磨き残しやゆすぎが不十分な場合は職員が一部介助を実施している。		
44	(19)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	最低限度の支持や見守りをする事で基本対応としている。また、過去の生活歴を参考にトイレの回数や方法など、個別の支援方をまとめ、ケア時に活かすようにしている。	一人ひとりの排泄パターンを把握し、声かけ、誘導をすると共に、使いやすい設備で、殆ど利用者はトイレ使用となっている。オムツやパット使用についても見直しをして支援している。	

グループホーム オアシスはぎ園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	乳製品の摂取を毎日実施している。普段から水分補給には便通効果が期待できる「ハブ茶」を使用している。便秘傾向が強く、援下剤に頼る割合が高い利用者には個別に「ヤーコン茶」「キクイモ茶」等を飲んで頂くことで薬に頼らず便通を改善し、健康管理する取り組みを行っている。		
46	(20)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	日中の入浴について、夜間入浴も試行中である。利用者の心身レベルにもよるが、昼間と夜間とで自己選択において入浴してもらえるような体制を整えつつある。	希望すれば毎日可能で、基本的には15時から17時となっているが、利用者の希望によって夜間入浴を実施している。清拭、シャワー浴、足浴等の支援もあり入浴が楽しみ、くつろげる支援をすると共に、入浴を嫌がる場合には声かけや時間をずらすなどの工夫をしている。	
47		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	在宅での生活時の様子や、職業歴などを参考に、一人ひとりの状況に合わせた就寝支援を行うように徹底している。職員の都合に合わせた時間帯での就寝支援ではなく、利用者の夜間安眠のためにどのようなかわりを持つべきか、会議のなどの際に定義し議論する機会もある。		
48		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	かかりつけ医の指導も仰ぎながら、薬に関するマニュアルを参照しつつ理解を深めている。		
49	(21)	活躍できる場面づくり、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の余暇活動支援の中に職業歴や趣味といった部分を取り入れたゲームの実施、および温泉が好きな利用者への温泉入浴を計画したりと、一人ひとりの好みや願いを聞き取りながら、実施できるように少しずつ取り組んでいる。	散歩、買い物、縫い物、皮むき、味付け、活け花、書道、神社参拝、音楽療法、洗濯物たたみ、保育園児、小学生と合同の畑作り、鮎を食べる会への参加等、一人ひとりの活力を引き出したり、楽しみごとの支援をすると共に、感謝の気持ちを伝えるようにしている。	
50	(22)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	墓参りに行きたい等の要望がある時にはできるだけ前向きに検討し、実施するようにしている。離島出身の利用者等において、ふるさと訪問するような場合にはご家族の協力を仰いだりして対応している。	散歩、花見、温泉、ひな祭り見物、保育園運動会の見物、墓参り、ふるさと訪問など家族の協力を得ながらの外出支援をすると共に、個別支援もしている。	

グループホーム オアシスはぎ園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	日々の食材購入のために職員がスーパー等に立ち寄る際、利用者にも小額程度の金銭を持参してもらい、自分で好きな菓子や屋台で何かを購入するといった生活に密接した行為を入所後も継続できようような支援を実施している。		
52		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望があれば家族への連絡の取り次ぎも行い、外部への通信も可能である。家族から電話が入ってきたような場合でも、電話口まで利用者に来てもらい、電話を取り次ぐようにしている。		
53	(23)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活空間内では、利用者職員との体感温度の差に配慮しながら、利用者の目線で居心地のよい環境づくりをしている。	玄関、食堂は広く明るく、畳の間もあり、洗濯物をたたんだり利用者がゆったりと過ごせる工夫をしている。中庭が見える回廊式の廊下で両ユニットが繋がっており、ウッドデッキには椅子が置かれ、居場所になると共に、自然の移ろいが感じられる。廊下は広く車椅子等も使いやすく、また、ソファもあり、くつろげるようになっている。	
54		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有空間(リビング)で気の合う利用者同士で作業をしてもらうようにしたり、たたみの上などに上がってごろんと横になって休めるような状況を作ったりして、一人ひとりの思いに即した居場所づくりに努めている。		
55	(24)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室はあくまでも利用者一人ひとりの家である、という考えのもと、なじみの家具やお気に入りの衣類、仏壇や書籍等、その人が落ち着いて生活する上で必要な物品はできるかぎり遠慮なく持ち込んで頂くようにしている。	ベッド、タンス、椅子、テーブル、家族の写真、テレビ、書籍等の使い慣れた物や花を飾ったり、聖書などの好みの物等が置かれており、一人ひとりが居心地良く過ごせるよう工夫している。	
56		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	日めくりカレンダーの位置をあえて床から近いところに設置してしゃがみ込む動作の維持を図ったり、トイレの場所の認知を理解しやすくするためのポスターの掲示やペーパータオルとトイレペーパーの違いを分かりやすくするよう注意書きを掲示したりして、自立と安全を目指しつつ快適な生活を送って頂けるように環境調整している。		

2. 目標達成計画

事業所名 グループホーム オアシスはぎ園

作成日：平成 23年 1月 14日

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1年	30	地域ボランティアの来園は定期的に行なわれている。畑作りや、隣の保育園と一緒に行う夏まつり等の行事での交流はあるが日頃の活動を定期的に行なっていく必要がある。	利用者にとって、地域の人々との憩いの場や楽しみの機会となるボランティアとの交流は継続しながら利用者と地域の人々が馴染みの関係を築ける機会を増やす。	食材として使用する米を購入している農家へ出向いて、稲作づくりを見学し、できるところから稲作づくりを共に行なったり、地域の漁協等で魚を購入し出向く等、積極的に地域資源を活用し、安全で豊かな生活を支援していく。	1年
2	37	一人ひとりの人格の尊重し、プライバシーに配慮した言葉かけや対応を意識して、利用者の尊厳確保に努めているところだが、十分に周知徹底できていない部分がある。	職員が利用者の人格を尊重する上で、まず利用者に対する言葉遣いや声かけを通し、尊厳意識を高めていく。	グループホーム会議等を通して言葉遣いについて考える機会を設ける。また、お互いに話し合うことで常に意識していく。	1年
3					
4					
5					

注1)項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2)項目数が足りない場合は、行を追加すること。